

初年次必修科目「地域学入門」の2011年度授業実践報告

竹川 俊夫*・土井 康作**

A Report on Classroom Practice of a Compulsory First-Year Subject of
"Introduction to Regional Sciences" in the School Year 2011

TAKEGAWA Toshio, DOI Kosaku

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第8巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.8 / No.3

平成24年3月30日発行 March 30, 2012

初年次必修科目「地域学入門」の2011年度授業実践報告

竹川 俊夫*・土井 康作**

A Report on Classroom Practice of a Compulsory First-Year Subject of “Introduction to Regional Sciences” in the School Year 2011

TAKEGAWA Toshio, DOI Kosaku

キーワード：地域学部 地域学入門 初年次教育 海士町 南部町

Key Words: Faculty of Regional Sciences, Introduction to Regional Sciences, first year education/experience, Ama Town, Nanbu Town

1. はじめに

鳥取大学地域学部における初年次必修科目「地域学入門」は、2004年度の開講から数えて本年度で8年目を迎えた。本年度は、2008年度から3カ年にわたってコーディネーターを務めてきた渡部教授に代わって、地域政策学科の竹川がコーディネーターを務めることとなった。これまで渡部教授は、内外の講師による「地域学」の入門的講義に加えて、講義冒頭15分を使った予習事項の発表や、中間・総括の2度にわたる学級担任と新入生とのディスカッションを実施し、約200名の同級生が一堂に会する前で発言する機会を与えて彼らの変容を促そうとする「参加型・ゆさぶり型の授業」を実践しながら、半期15回の講義スタイルを固めてきたところであった¹。

2011年度においては、地域学入門・地域学総説の講義内容を検討する「企画会議」を通じて、地域学入門に対して、昨年度までの基本的な運営方法を継承しつつも、教育効果を高めるためにいくつかの見直しを実施する方針が示された。こうして後述する講義計画の大幅な変更や、昼休みの時間を利用した外部講師と学生・教員との意見交換会の定例開催といった新たな試みを実施されることになった。以下では、今年度の入学者の状況を簡単に整理した後、実際に実施した講義の概要と講義運営の詳細、並びにそれらに対してコーディネーターが配慮した点を述べる。次に、地域学入門の番外編の活動として定例化しつつある南部町及び海士町への課外フィールドワークの実施結果を報告する。そして、講義最終回に回収した学生アンケート結果から、講義を通じた学生の変化を捉えるとともに、来年度に向けた課題を考察する。

* 鳥取大学地域学部准教授（地域政策学科）

** 教授（地域教育学科）

¹ 地域学入門に関するこれまでの取り組みの詳細については、渡部昭男・竹川俊夫・土井康作・野田邦弘・岡田昭明（2009）「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容—2009年度における授業実践のまとめ—」『地域学論集』6(2), pp.69-104, 並びに渡部昭男・竹川俊夫・足立和美・鶴崎展巨（2010）「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容（第2報）—2010年度における授業実践のまとめ—」『地域学論集』7(2), pp.157-96, を参照されたい。

2. 2011年度新入生の状況

まず入試区分別に見た2011年度新入生の状況を確認する。地域学部4学科と各学部の入学者を入試区部で整理し、それぞれの割合を算出したものが表1である。

表1 入試区分別入学者数一覧

| | AO | | 推薦 | | 特別 | | 前期 | | 後期 | | 合計 | |
|--------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-------|-------|
| | 入学者 | 割合(%) | 入学者 | 割合(%) | 入学者 | 割合(%) | 入学者 | 割合(%) | 入学者 | 割合(%) | 入学者 | 割合(%) |
| 地域政策学科 | 9 | 17.6 | 3 | 5.9 | | | 31 | 60.8 | 8 | 15.7 | 51 | 100.0 |
| 地域教育学科 | 6 | 10.7 | | 0.0 | | | 40 | 71.4 | 10 | 17.9 | 56 | 100.0 |
| 地域文化学科 | 4 | 7.7 | 2 | 3.8 | | | 30 | 57.7 | 16 | 30.8 | 52 | 100.0 |
| 地域環境学科 | 3 | 6.3 | 2 | 4.2 | | | 30 | 62.5 | 13 | 27.1 | 48 | 100.0 |
| 地域学部 | 22 | 10.6 | 7 | 3.4 | | | 131 | 63.3 | 47 | 22.7 | 207 | 100.0 |
| 医学部 | | | 65 | 24.8 | | | 147 | 56.1 | 50 | 19.1 | 262 | 100.0 |
| 工学部 | 3 | 0.6 | 33 | 6.7 | 3 | 0.6 | 340 | 69.1 | 113 | 23.0 | 492 | 100.0 |
| 農学部 | 15 | 6.1 | 47 | 19.2 | | | 160 | 65.3 | 23 | 9.4 | 245 | 100.0 |
| 鳥取大学 | 40 | 3.3 | 152 | 12.6 | 3 | 0.2 | 778 | 64.5 | 233 | 19.3 | 1,206 | 100.0 |

(注)学部合計および鳥取大学合計の上段は私費外国人留学生を外数で示したもの。
出所)鳥取大学「平成23年度入学試験に関する調査」を元に筆者作成。

私費外国人留学生を除いた鳥取大学全体の入学者 1,206 名のうち、地域学部に入学者は 207 名であった。また学科別の入学者数は、地域政策学科 51 名、地域教育学科 56 名、地域文化学科 52 名、地域環境学科 48 名であった。学科ごとの入学者の特徴を入試区分から見ると、地域政策学科では比較的AO入試での入学者の割合が高く、後期入試での入学者の割合が低いという特徴が見られる。地域教育学科の特徴としては、推薦入試の入学者がいなかったことと前期入試で入学する学生の割合が高いことが指摘できる。一方、地域文化学科は、前期入試での入学者の割合が最も低く、一方で後期入試での入学者の割合が最も高くなっている。地域環境学科はAO入試入学者の割合が低く、後期入試での入学者の割合が地域文化学科に続いて高いという特徴が見られる。

次に、表1で地域学部と他学部との違いに目を転じると、地域学部はAO入試での入学者の割合が比較的高いのが特徴である。さらに入試区分以外のデータを参考にして入学者の特徴を捉えてみると、まず地域学部入学者の男女構成比については、男子 37.2%に対して女子 62.8%と、全学部で最も女子の割合が高いという特徴がある。反対に男子の割合が最も高いのは工学部で、構成比は男子 88.2%に対しては女子 11.8%と、女子の割合はかなり低い。また、地域学部入学者の出身高校の所在地については、県内高校出身者の割合が 38.6%であり、医学部 (30.9%)、工学部 (8.9%)、農学部 (14.7%) と比較して地元出身者の割合が非常に高いのが特徴である。

講義では、以上のような学生の多様性に配慮しながら、新入生の「地域学」への興味関心を引き出したり、地域づくりの具体的なイメージを持たせつつその社会的意義を考察させることが求められる。では次に、2011年度の講義全体を通じてどのような取り組みを实践し、講義を通じて学生からどのような反応が得られたのかを述べたい。

3. 2011年度の講義概要

(1) スタッフ体制と講義運営

地域学入門は、前任者の時代からコーディネーター（統括責任者）1名と各学科・センターから選出された学科世話人5名の計6名が運営面を担い、各回を担当する学内外の講師陣と連携しながら講義を進める。また、資料の印刷や配布、講義室のPCや音響機材のセッティング等でスタッフや講師陣をサポートするためにティーチング・アシスタント（TA）が2名配置されている。各年度の講義計画については、前年度の12月頃より地域学研究会の下に設置される「企画会議」において、3年次必修科目の「地域学総説」と一緒に検討され、そこでの決定に従って講師の手配や講義開始に向けた準備が進められる。2011年度の「地域学入門」は、コーディネーター（統括責任者）を筆者が務め、学科世話人は、馬場芳（地域政策学科）、土井康作（地域教育学科）、ケイツ・A・キッペン（地域文化学科）、中原計（地域環境学科）そして西岡千秋（芸術文化センター）がそれぞれ担当した。またTAを務めたのは、地域学研究科地域創造専攻の森口卓（M2）と國影美雪（M1）であった。

コーディネーターの主な役割は、まず、前年度（1~3月）から講義開始までの間に「企画会議」における講義計画の決定を受けて、次年度の講師候補者への依頼並びに承諾取り付けとスケジュール調整を行うことと、新年度当初にTAを確保して事務体制を確立させることである。4月の講義開始以降は、まず初回講義の冒頭に、半期15回の講義の進め方や単位認定の方法等に関するオリエンテーションとテキスト『地域学入門』に関する説明を行ったほか、各回の資料の準備手配と配布、総合司会、出席カードやレポートの回収と学科世話人への配達、授業評価アンケートの配布・回収等をTAの協力を得ながら進めることになる。出席カードやレポートは、一旦TAが全学科分を取りまとめた後に学籍番号順に並び替え、学科ごとの束をそれぞれの学科世話人のレターケースに投入する。一方、学科世話人は、毎回の出席カードによって出欠確認を行うとともに、3回に分けて実施される課題レポートの採点、学期末の成績評価入力を担う。また出席不振や遅刻の目立つ学生へのフォローも学科世話人が担当する。

各回の講師には前週までに配布資料の原稿の提出をお願いし、TAが事前に250部を印刷する。なお、外部講師を招いて講義を行う際は、その講師を紹介いただいた学部教員の協力を仰いで、講義当日の出迎えから見送りまでをその教員に手伝ってもらっている。

(2) シラバスと講義の概要

2010年度の「地域学入門」では、第1部『「地域学」とは何か』、第2部「鳥取大学の地域連携活動」、第3部『「地域づくり」の実践』の3部構成であったが、2011年度は、イントロダクション（1回）、第1部「私たちにもできる身近な地域連携・地域交流活動」（2~4回）、第2部「地域づくり・地域研究の実践」（5~11回）、第3部『「地域学」とは何か』（12~14回）、総合討論（15回）と大幅に構成を変化させた。特に大きな変化と言えるのは、『「地域学」とは何か』という理論学習を最後のパートに移したことである。このような変更が必要とされた理由は、特に前年度までの新入生の反応を観察した結果として、入学してすぐの時期は地域づくり実践に対するイメージが乏しいこともあり、その段階で理論学習を行うと理論と実践との関連づけができないため、「地域学とは何か」という問いに対する理論的な説明が頭に入りにくいのではないかと考えられたからである。

特にこうした傾向は出席カードに記入された新入生の感想を通じて強く感じ取ることができた。すなわち、2010年度では、第1部の理論編に対する感想は、地域学の捉え方について戸惑いを示す

ものが多かったのに対して、地域づくり活動や地域研究の具体的な事例が紹介される第2部、第3部になると、回が進むごとに反応がよりシャープに変化し、新生生の興味・関心が高まっている様子が伝わってきたのである。こうした状況をふまえて企画会議で議論を行ったところ、まずは学部教員や先輩学生が取り組む身近な事例にスポットを当てて、大学が地域と連携しながら交流活動や研究を実践する様子を理解させ、次にそこから視野を広げて地域づくりの最前線に立つエキスパートからの講義を受けることで、地域づくりや地域研究に対するイメージを深めさせることを優先する。そしてここから「地域学とは何か」という理論学習に切り込めば、新生生が実践のイメージと結びつけながら理論学習に取り組むことができるので、入学早々の時期に学ぶよりも学習効果が高まるのではないかという結論に至った。

ただし、理論学習部分を第3部という形で後回しにしても、講義の冒頭に「地域学」の導入的な講義は必要になる。このため第1回目の講義においては、地域学研究会副会長の柳原邦光が、「なぜ今地域なのか。地域学が目指すもの」と題した講義を行った。本講義は、2011年3月に出版された講義テキスト『地域学入門』の第1章の内容をベースにしたもので、地域概念や地域学の特徴並びにそれが登場する社会背景等が概略的に説明された。

ここで、第2回目以降の部構成と各回の講義のポイントについて簡単に整理しておこう。第1部(2~4回)では「私たちにもできる身近な地域連携・地域交流活動」というコンセプトのもと、学部教員や学生が実践している身近な活動事例を新生生に紹介している。第2回(担当:野田邦弘)では、大学の社会的役割や地域学部の地域連携教育の体系等がレクチャーされた後、実際に活動に参加している先輩学生が登壇し、自分たちの活動を紹介しつつ新生生に参加を促した。紹介された活動は、①南部町コミュニティスクール訪問研修、②倉吉淀屋サミット、③えんがわ事業及び野田教授が取り組んでいる④明倫NEXT100AIRである。第3回(担当:土井康作)では、土井教授が取り組んでいる「ものづくり道場」と「因幡手づくりまつり」について説明が行われた後、「因幡手づくりまつり」の準備に当たっている学生リーダーが登壇して、新生生に活動の様子を語るとともに、関心のある新生生に広く参加を呼び掛けた。第4回(担当:ケイツ・A・キッペン)では、ケイツ教授のこれまでの人生経験が語られた後、教授が関わっている国際交流活動がいくつも紹介された。その主な活動は、「タイム(とっとり国際交流連絡会)」、「鳥取県国際交流センター」、「鳥取市国際交流プラザ」、「鳥取大学国際交流センター」、「鳥取大学国際交流サイト」、「ピースボート」、「アジア青年会議」等多岐にわたり、さらにこれらの活動に参加している留学生や先輩学生が登壇して、新生生に広く参加を呼び掛けた。

続く第2部(地域づくり・地域研究の実践)では、第5回に海士町長の山内道雄氏が講師を務め、氏が取り組んできた海士町の行政改革と地域の生き残りための戦略と成果が語られた。なお山内氏の講義は2011年度で連続3回目になるが、最初の年の講義が縁となって毎年夏季休暇中に希望した学生による海士町訪問研修が実施されている。今回の講義の冒頭では、2010年9月の訪問研修に参加した学生から、その際の様子について紹介が行われた。第6回は全国町村会調査室長の坂本誠氏が講師を務め、現在大きな話題になっているTPPやFTA等の仕組みについての解説やそれらが地域の農業に与える影響を中心に、中山間地域で起こっている現状と課題についてのレクチャーが行われた。第7回では、小玉芳敏教授より「山陰海岸ジオパーク」についての解説が行われた後、岩美西小学校の村上校長より岩美町の自然を活用した課外教育と児童のジオパーク活動への参加の様子が語られた。第8回では、南部町教育委員会の三上恵子先生より、南部町会見小学校で取り組

2011年度前期 地域学入門（水曜2限・共通教育棟A20）【訂正版】

2011-4-27

| イントロダクション | | |
|-----------|-------|--|
| 1回 | 4月13日 | ①講義オリエンテーションと学科世話人・講師の紹介：①は竹川俊夫(地域政策・総括担当) ②テキスト『地域学入門』の紹介 ③なぜ今地域なのか、地域学が目指すもの：②・③は柳原邦光(地域文化・教授) |

第1部 私たちにもできる身近な地域連携・地域交流活動

| | | | |
|----|-------|------------------------|---------------------------|
| 2回 | 4月20日 | 野田邦弘(地域文化・教授)＋学生 | 学生の地域交流活動(えんがわ活動、淀屋サミット等) |
| 3回 | 4月27日 | 土井康作(地域教育・教授)＋学生 | ものづくり道場の実験と因幡の手づくりまつり |
| 4回 | 5月11日 | ケイツ・A・キッペン(地域文化・教授)＋学生 | 地域における国際交流活動 |

【第1回レポート(5月18日講義終了時提出・20点)】**課題**：学生が参加する地域連携・交流活動の意義と今後の私
 ・2～4回の講義においてどのような地域連携・地域交流活動が提示されたかを簡潔に整理したうえで、学生が参加する地域連携・地域交流活動が地域社会や学生自身に与えた意義を考察するとともに、今後自分はどうしたいかを述べなさい。
 ・テキスト『地域学入門』の序章と第1章「なぜいま地域を考えるのか」を読んでレポートに活かすこと。
 ・体裁：A4版横書1枚、40字×43行、最初の3行に「タイトル」「学科・学籍番号」「氏名」を記載。本文は40行以内とします。

第2部 地域づくり・地域研究の実践

| | | | |
|-----|-------|-----------------------------|---------------------|
| 5回 | 5月18日 | 山内道雄(海士町長)＋竹川(政策)＋学生 | 地域の生き残り戦略 |
| 6回 | 5月25日 | 坂本誠(全国町村会調査室長)＋筒井(政策) | 地域における農業の現状とTPP問題 |
| 7回 | 6月3日 | 村上洋司(岩美西小学校校長)＋小玉(環境) | ジオパークを活用した地域づくり |
| 8回 | 6月8日 | 三上恵子(南部町教育委員会学校教育室長)＋土井(教育) | コミュニティスクールの挑戦 |
| 9回 | 6月15日 | 鈴木忠志(劇団SCOT主宰)＋野田(文化) | 富山県利賀村における劇団SCOTの挑戦 |
| 10回 | 6月22日 | 鈴木康正(津山ホルモンうどん研究会代表)＋福田(教育) | ホルモンうどんによる地域の活性化 |
| 11回 | 6月29日 | 中間討論(学科世話人VS受講生) | |

【第2回レポート(7月6日講義終了時提出・40点)】**課題**：地域学と「地域づくり」「人づくり」
 ・地域学部では「地域づくり」や「地域における人づくり」に取り組む志と能力のある人材を養成します。5～10回の講義内容を簡潔に整理したうえで最も印象に残った実践をひとつ挙げ、将来どのような「地域づくり(人づくり)」に取り組んでみたい(または在学中に学習・研究してみたい)かを述べなさい。
 ・テキスト第3部(第9～12章)の他に1冊以上文献を読んでレポートに活かすこと(末尾に参考図書に記載すること)。
 ・体裁：A4版横書1枚の画面印刷、40字×43行、最初の3行に「タイトル」「学科・学籍番号」「氏名」を記載。おおよその配分量は、表が講義の整理、裏は印象に残った実践と自分が取り組みたい実践・研究に関する論述＋参考文献やURL。

第3部 「地域学」とは何か

| | | | |
|-----|-------|-----------------|------------|
| 12回 | 7月6日 | 仲野 誠(地域政策・准教授) | ローカルとグローバル |
| 13回 | 7月13日 | 吉村伸夫(地域文化・教授) | 地域で生きる |
| 14回 | 7月20日 | 光多長温(鳥取大学・特任教授) | 地域学について |

【第3回レポート(7月27日講義終了時提出・40点)】**課題**：「地域学」とは何か
 ・12～14回の講義のポイントを要約するとともに、第1部・第2部の講義で学んだ実践事例や参考文献の内容をふまえて、鳥取大学の考える「地域学」とは何かをまとめてください。
 ・テキストの第1章から第3章を読む他に、新たに1冊以上文献を読んでレポートに活かすこと(レポートの末尾に参考図書に記載すること)。
 ・レポート上に参考文献に関する記述が見当たらない場合は減点になります(第2回レポートも同様)。
 ・体裁：A4版横書1枚の画面印刷、40字×43行、最初の3行に「タイトル」「学科・学籍番号」「氏名」を記載。おおよその配分量は、表が講義のポイント整理、裏はテキストや参考文献をふまえた「地域学」に関する論述＋参考文献やURL。

| | | | |
|-----|-------|----------------------|--|
| 15回 | 7月27日 | 総合討論(学科世話人VS受講生)＋まとめ | |
|-----|-------|----------------------|--|

◎スタッフ：総括／竹川(政策)、学科世話人／馬場(政策)、土井(教育)、ケイツ(文化)、中原(環境)、西岡(芸術)

◎TA：森口(政策)、国影(文化)

◎1講義(90分)の配分＝冒頭15分：予習事項の発表＋60分：講師の講義＋15分：質疑応答＆感想文記入

◎冒頭15分には各学科より指定された学生が宿題を発表する。また終了時出席票を兼ねた感想文を毎回提出する。4回以上欠席の場合未履修扱いとします。遅刻・欠席のないように！

2010年度前期(水2限・共通A20教室) 地域学入門 2010.4.14

第1部 「地域学」とは何か

- 4/14 1. 地域学について 光多長温(鳥取大学・特任教授)
 4/21 2. 地域で生きる 吉村伸夫(地域文化・教授)
 4/28 3. ローカルとグローバル 仲野 誠(地域政策・准教授)

【第1回レポート(20点)】～1冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと(レポートの末尾に参考図書に記載)。

課題:「地域学」とは何か…連休に帰省したら家族や友人から「地域学って何?」と尋ねられました。3回の講義をベースに、鳥取大学の考える「地域学」について能く説明しましょう。

- * 提出: 5/12(水) 講義終了時・・・初回レポートはワープロソフトの「書式設定」等の練習も兼ねています。
- * 体裁(書式設定): A4判縦1枚 40字×43行横書き、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載 本文40行以内。

第2部 鳥取大学の地域連携活動

*印は外部講師

- 5/12 4. 大学と学生の立場からの地域連携活動 野田邦弘(地域文化・教授) + *辻聖太郎(大阪市大大学院・院生)
 5/19 5. 鳥取大学と明治大学との連携活動 *水野勝之(明治大学商学部・教授) + 野田
 5/26 6. ものづくり道場の実験と因縁の手づくりまつり 土井康作(地域教育・教授) + 先輩学生
 6/02 7. 中間討論(学科世話人 vs 受講生)

※論点: 第1レポートの好評・第2レポートへの期待+地域連携活動について

【第2回レポート(40点)】～新たに1冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと(同)。

課題:「地域連携活動」への期待と関与…4～6回の講義においてどのような「地域連携活動」が提示されたかをまず整理した上で、地域学研究会のサイトで紹介されている「地域連携活動」も参照しつつ、鳥取大学の地域連携活動への期待や自らの関与について述べなさい。

- * 提出: 6/16(水) 講義終了時・・・2回目レポートは「両面印刷」の練習も兼ねています。
- * 体裁: A4判1枚の両面印刷 40字×43行、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載。およびその分量配分は表裏が講義の整理、裏面は関心のある課題に関する論述+参考文献やURLなど。

第3部 「地域づくり」の実践

- 6/09 8. 鳥取砂丘の自然を読み解く: 動物のインベントリから鳥取砂丘検定まで 鶴崎辰巨(地域環境・教授)
 6/16 9. アートの方で地域を変える *北川フラム(大地の芸術祭総合ディレクター) + 野田
 6/23 10. 地域の生き残り戦略 *山内道雄(海士町長) + 竹川俊夫(地域政策・講師)
 6/30 11. コミュニティスクールの挑戦 *杉本由香里(南部町教育委員会) + 渡部昭男(地域教育・教授)
 7/07 12. 景観から読む鳥取の風土と人々の暮らし 小玉芳敏(地域環境・教授)
 7/14 13. 鳥の劇場の実験 *中島誠人(鳥の劇場・主宰) + 新倉健(芸術センター・教授)
 7/21 14. 総合討論(学科世話人 vs 受講生)

※第2レポートの好評・最終レポートへの期待+「地域づくりの実践」について

【第3回レポート(40点)】～新たに2冊以上の文献を読んでレポートに活かすこと(同)。

課題:「地域学」と「地域づくり・人づくり」…地域学部では「地域づくり」や「地域における人づくり」に取り組む志と能力のある人材を養成します。「地域学入門」を受講して、どのような「地域づくり(人づくり)」に取り組んでみたい(または在学中に学習・研究してみたい)と思いましたが、「地域学」の可能性と重ねて述べなさい。

- * 提出: 7/28(水) 講義終了時
 - * 体裁: A4判1枚両面 40字×43行、3行に課題名・学科・学籍番号・氏名を記載 本文83行以内。
- 7/28 15. 総括レクチャー 「地域学とは何か」=第1部担当者による総括の講義(またはパネル討論)

◎総括=渡部、各学科世話人=竹川(政策)、足立(教育)、茨木(文化)・平井(セキ)、鶴崎(環境)。

◎TA=寺岡(院生・地域教育専攻12年生)

◎90分の配分=15分(予習事項の発表) + 60分(講師の講義) + 15分(質疑応答&感想文記入)

◎受講生へ: ①各学科から1名が出て毎回発表。②感想文(質問)を毎回提出。③4回以上の欠席は未履修扱い。

◎講義2単位=「[授業1コマ(2時間換算) + 4時間の自習] × 15回」の計90時間～4冊以上の文献を読破!

まれている「コミュニティ・スクール」の実践が詳しく紹介された。なお海士町と同様に、本講義が縁となって南部町の会見小学校への訪問研修が実施されおり、その模様については第2回の学生活動紹介コーナーにおいて実際に参加した学生から詳しく報告された。第9回では富山県南砺市の利賀村を拠点に劇団SCOTを主宰する鈴木忠志氏より、過疎農山村で日本家屋を活用した演劇活動を始めた経緯やその社会的インパクト等についてのレクチャーが行われた。第10回は、今年度の最後の事例紹介として、現在のB級グルメブームの火付け役となったB級グルメグランプリにおいて、上位入賞を収めた津山ホルモンうどん研究会代表の鈴木康正氏から、地域おこしに向けた活動の舞台裏やその社会的影響や意義について映像を交えたレクチャーが行われた。以上のそうそうたる地域づくり・地域研究の取り組み紹介に続いて、第2部の締めくくりとして「中間討論」が実施された。学科世話人の5人とコーディネーターが舞台に並び、新入生と対峙しながら質疑応答・意見交換を行うもので、5月18日に提出された第1回レポートの内容や毎回出席カードに書かれる講義に対する感想を元に、新入生の気づきの傾向と問題点・課題が学科世話人から投げかけられると、逆に新入生からは地域に対する視点や地域づくりへの参加の仕方等についての質問が投げかけられる等のキャッチボールが行われた。

引き続き講義は、事例紹介を中心とする第1部・2部から、理論学習を中心とする第3部（「地域学」とは何か）へと展開した。第3部の3回の講義内容は2010年度と同様に「地域学について」（光多長温特任教授）、「地域で生きる」（吉村伸夫教授）、「ローカルとグローバル」（仲野誠准教授）という3回セットメニューである。前任のコーディネーターであった渡部教授は、これら3名の地域学のアプローチを、光多先生の「横串論」、吉村先生の「ノーム（ノルム）論」、仲野先生の「構造・関係論」と特徴づけ、これらのセットをベースに「地域学とは何か」という問いに対する理論的な理解を促そうと試みていたが、2011年度も基本的この流れを踏襲した。ただし第2部までの事例との関連づけを考慮してあえて順序を逆転させて、仲野（第12回）→吉村（第13回）→光多（第14回）という構成とし、光多特任教授の「地域学について」を講義全体のまとめに位置づけた。そして第15回の最終講義日には、中間討論に続く総合討論を企画し、「地域」や「地域学」の捉え方をめぐって新入生が疑問に思うことを率直に教員に伝えるとともに、学科世話人の側からも、新入生の認識や表現に関する不満も含めてそれぞれの考えを学生に伝えながら、興味・関心の喚起と教員と学生との距離の短縮化を図った。なお地域学入門のシラバスを2010年度と2011年度を対比できるよう前ページに掲載したので、講義の構成に関する詳細についてはそちらも参照願いたい。

（3）2011年度における講義運営の工夫

①シラバス構成：上記で述べた通り、前任の渡部教授から筆者のコーディネートに交代した今年度の変化の最大のポイントはシラバス構成にある。しかしながら、結果としては企画会議が意図したような、実践と理論の関連づけを促進するという教育的な効果は見られなかったと言って良い。むしろ「地域学とは何か」を十分に語らないまま第2~3部で事例の理解を進めようとしたことで新入生の混乱を招いた様子で、総合討論や授業アンケートを通じて「地域学とは何か」を最初に教えてほしかったというリクエストが散見された。この点に関しては、理論学習の促進に向けて実践と理論とを結び付けることをシラバス上で大きく意識したにもかかわらず、第3部の講義においては、講師の側から事例に即した理論の解説が行われず、学生任せの理解になってしまったことが要因ではないかと考えられる。

②昼休みを利用した反省会&意見交換会の実施：シラバス構成の変化に続く2011年度の講義運営の

工夫は、講義終了後の昼休みに反省会ないしは意見交換会を実施したことである。外部講師によって講義が行われた第2部では、講義時間内に質疑応答の時間を十分に確保することが困難で、かつ大講義室では気軽に質問しづらいという点もふまえて、毎回別室（地域学部棟大会議室）移動し、講師を囲んで昼食をとりながら意見交換できる機会を用意した。今年度は意見交換会を合計6回開催したが、残念ながら毎回の参加者は、コーディネーター・学科世話人とTAを除けば、教員・学生を含めて数名程度に留まることが多かった。一方、第2部以外の回は、コーディネーター、学科世話が地域学部棟2290教室に移動して反省会を実施した。出席カードに書かれた感想に目を通しながら、講義の良かった点や課題について意見を交わした。特にこの場にはTAも参加させて、彼らの気づきを促すために積極的に発言できる機会を提供した。

③教室空間づくりと時間配分：前年度に続いて地域学部棟に隣接した共通教育棟の2階「A20教室」を使用し、資料配付や感想カードなどの学科別回収に便利のように、着席は学科別に縦列に指定した（教壇からみて右側から地域政策学科・地域教育学科・地域文化学科・地域環境学科の順）。時間配分はこれまでの方法を継承した。すなわち原則として1コマ90分の構成を、1)予習事項の発表（15分）—2)講師の講義（60分）—3)質疑応答&感想（出席カード）記入（15分）とした。またイベント等の案内が要請された場合は、最初又は最後の部分で対応した。上記で述べたように、講義時間は全般的に伸びる傾向にあり、3)の質疑応答の時間については、一部の講義を除いてほとんど確保することはできなかった（第2部の外部講師の場合はそれを見込んで意見交換会を設定した）。

④予習事項の発表における工夫：講義の冒頭での発表は、初回と中間・総合討論会の回の計3回以外すべて実施した。発表すべき内容は、該当講義の内容について講師や学科世話人のサポートを受けて調べたことがメインであるが、今年度はそれに「自己紹介」を加え、どうして鳥取大学の地域学部を志望したのかを語らせるようにした。また発表当番については、第1回から最後まですべて決めておくとともに、2回目・3回目はAO入学者、4回目は推薦入学者、5回目以降はランダムで重複の内容に選定した。AO入学者を最初にした理由は、本学部への志望動機が明確であって、プレゼンテーション力も相対的に高いことが期待できるので、以降の発表者の模範としてプレゼンテーションの質に良い影響を与えると考えたからである。実際に実行した結果、狙い通りに全体的にプレゼンテーションの質が上がった感じである。

⑤出欠確認：出欠は毎回提出する「出席カード」で確認した。4回以上欠席すると評価対象外となるので、欠席が嵩んできた時点で学級担任から連絡を入れて、支援してもらった。

4. 南部町・会見小学校コミュニティ・スクール訪問研修の実施

（1）訪問研修の概要

【参加者】

- ・参加者・・・21名（地域学部1年生18名、教員2名、社会貢献課亀尾氏）、
- ・引率教員・・・土井教授、山根教授

【日程】

- ・訪問日・・・2011年9月2日（金）

・行程

8:15 鳥取大学集合 バスにて出発

10:30 現地到着（南部町立会見小学校）

雨のため、「そばの種まき」を中止し、そばネット、GTAの皆さんとそば打ち体験

- (昼食) 手打ちそば
 13:30 コミュニティ・スクール(学校運営協議会)関係者との研修会
 14:30 会見小学校出発
 町内視察(とっとり花回廊(野の花特産センター外))
 17:30 鳥取大学到着・解散

(2) 研修報告

この度の訪問は、昨年に引き続き2回目になる。地域学入門の授業において講義頂いた三上恵子先生のコミュニティ・スクールの先進的教育実践に触発された18名の学生達の自主参加によるものである。18名という数字は、本授業が地域学部必修の授業で凡そ200名が受講しているの、受講生の約一割の学生が自主的に参加を希望したということになる。いかにコミュニティ・スクールの取り組みが学生達に魅力的だったかが分かる。かつて自分たちが学んできた従来の学校とは異なる空気を敏感に感じ取ったものと思われる。

コミュニティ・スクールは、2004年「地方教育行政の組織及運営に関する法律の改正」により導入された。この制度は、保護者や地域住民は、合議制の機関である学校運営協議会を通じて、一定の権限と責任を持って学校運営に参画し、学校運営の基本方針を承認したり、教育活動について意見を述べたりすることができる。

南部町学校運営協議会要綱(2006年)をみると、第1条の趣旨は次のように示されている。「学校運営協議会は、保護者及び地域住民の学校運営への参画を推進することにより、教職員・保護者・地域住民の信頼関係を深めるとともに、学校・過程・地域社会の役割と背金を明確にしながら教育力を相互に高め、共に連携して子どもの豊かな学びと育ちを実現することを目的とする。」とある。

文部科学省による報告をみると、コミュニティ・スクールの効果は、地域住民が協力的になる、学校への苦情が提案型になる、自治会等による主体的な支援が拡大する、地元のまつりづくりなどで参加する子どもが増え、地域が活性化することなどを挙げている。

そのようなこのような効果の事例から、2011年4月1日時点で、全国のコミュニティ・スクール数は789校が指定され、鳥取県では、会見小学校を含め小学校4校、中学校1校の5校が指定されている。2011年のコミュニティ・スクールの数は、2010年よりも160校増加し、増加傾向にある。

会見小学校コミュニティ・スクール訪問に向けて、自主参加学生と事前に2度の打ち合わせ会を開いた。実行委員会をつくり、チーフを決め、さらに1グループ3~5人から成る5つの班をつくった。また、チーフを中心に、全体スケジュールやメンバー表やコミュニティ・スクールの事前学習資料が掲載された冊子を作成した。事前にこの冊子を配布し、課題として、記載されているコミュニティ・スクールの内容を理解してくること、質問を用意してくることとした。

当日の簡単なスケジュールは以下の通りである。

- 8:00 鳥取大学集合(広報センター前) 8:15 鳥大出発 10:30 南部町立会見小学校到着 10:30~11:30 そば打ち体験(大雨のためそばの種まき体験は中止した)(GTAの方達と一緒に) 昼食(自分達で打ったそばを食べた) 13:30~14:30 コミュニティ・スクール研修会開始(1, 校長あいさつ(森谷哲郎校長) 2, 会長あいさつ(小林太治会長) 3, 鳥取大学教員あいさつ 4, 自己紹介 5, 取り組みの紹介①本校のコミュニティ・スクールの概要(妹尾) ②6年間児童とかかわって(小林会長) ③GTAの取り組みについて(永栄GTA部長) ④その他 6 懇談)
 14:30 会見小学校出発 15:15 鳥取大学着

懇談会では、5班に分かれ、グループ討議が行われた。学生達から学校関係者に対し、多くの質問が出された。会見小学校の関係者からは、よく調べられており、多くの質問がなされたことを高く評価していただいた。



会見小学校でのそば打ち体験の様子



コミュニティ・スクール研修会の様子



研修ではグループ討議も行われた

次に、懇談の様子が伺える学生の感想（「地域」と「学校」のつながりと題した2人のレポート）を紹介する。

会見小学校のコミュニティ・スクールの発達によって南部町は変化している。会見小学校の児童たちにおいては出席率が向上し、また地域の人と関わることで自尊感情を得ることができている。地域においては、子ども達に意識が向かうようになった。地域が丸丸となって子どもたちをみて、育てていくことができることで親の大きな支えともなっている。

GTAの取り組みは今後教育現場においてより必要とされるようになっていくのではないだろうか。学校にお金がなく、またPTAが忙しくて学校に積極的に関われないという会見小学校と境遇が似た学校は全国に多数あるはずである。そういった学校を手助けできる存在がGTAである。GTAの存在は学校のみならず、子どもたちにおいても様々な職業があることを知ることができるという利点をもたらす。またGTAの中には、子育てで失敗した経験を活かしたいという思いを持った方もおり、そういった方々にとっては自らの経験を活かすチャンスのもなっている。

いる。

実際会見小学校に見学について感じたことは、まず児童が非常に活発で学校自体が明るいということである。学校が明るいと感じた一つの理由として、子ども達が私達に元気にあいさつしてくれたことがあげられる。後の懇談で小林さんが、児童の明確な変化はわからないが、以前よりもあいさつができるようになったのは変化の一つである、とおっしゃっており、確かに私が過ごしてきた小学校や中学校よりも会見小学校の子ども達はあいさつをよくすると感じた。また小林さんや永栄さんも子ども達に人気で、地域の人々と子ども達が非常に近い存在であることも感じさせられた。さらに興味を引かれたのは、コミュニティ・スクールの取り組みの成果として、児童の学力向上があげられていたことである。課外活動や学校外での子ども達、または校舎の清掃等をG T Aや地域の人がみってくれることによって、学校教諭は教材研究により多くの時間をあてることができるようになり、授業等を充実させることができるようになったのである。

地域に活力をもたらし、学校の活動を円滑にし、子ども達も活発にさせるコミュニティ・スクールであるが、もちろん課題もある。あげられるのはコミュニティ・スクールに参加する方が固定化してしまっている、学校評価において評価されてきたことを分析し生かすという研究があまり進んでいないなどといったことである。またG T Aについて私自身、核家族化が進んでいる今、都市部にある学校等でこういった活動を活発にさせるのは困難ではないかと感じた。しかし、G T Aは学校においてとても重要な存在となっており、是非とも多くの学校でG T Aのような活動が盛んになってほしい。地域で子どもを育てることが当たり前であるようになってほしい。どうすれば地域に関わらず、G T Aのような活動が行えるか、これから考えていきたい。今回の見学を通して、会見小学校に関わる方々の活動の根源は子どもと関わることの喜びにあると聞き非常に感動した。その小さな喜びのためにここまで子ども達にかけることができるのか、と驚かされた。このような環境で育つことができている会見小学校の子どもたちは恵まれている。このような環境で育つことが当たり前になってほしいと強く感じる事ができた。この思いを忘れず、いかにすればこういった環境を作り上げていくことができるかを、大学4年間を通して学んでいきたい。(佐藤和)

地域学入門の中でコミュニティ・スクールについて説明を聞いたとき、自分が将来目指したい地域と学校の関係だったから、この訪問のチャンスを生かして実際の様子を学びたいと思い訪問しようと思った。

私が訪問してまず感じたことは、学校の雰囲気が明るいということだった。子どもたちがすれ違うたびにあいさつをしてくれたり、先生方に歓迎の言葉をいただいたりしたときにそのことを強く感じ、学校に入ってすぐコミュニティ・スクールにさらに強く関心を持った。

そばを一緒に作ったG T Aの方々はとても親しみやすく、一時間ほどの短い時間であったが地域の暖かさを感じることができた。一緒に作業することで「G T Aの方々なら安心して子どもたちを任せられる」と先生方がおっしゃっていたことが理解できた気がした。今回体験できたのはそば打ちの名人の方々だけだったが、それでも本当に貴重な体験をさせていただいたと思う。このように何かに長けている方を招いて本物の教育ができるということは、ほかの小学校では実現しにくい会見だけのもののように感じた。だから私も、将来G T Aのみなさんのような方と一緒に子どもたちを育てていきたいという気持ちが大きく芽生えたが、果たして他の地域でも実現できることなのかという不安を持った。

会見小学校の子どもたちと遊ぶ中で、子どもたち同士とても仲が良く、素直であることが発見できた。私の地元ではあまり見られない光景にうらやましさを感じた。後に、これがコミュニティ・スクールであったことの成果ということを知り、私が地元で教師ができるようになったら会見小のような子どもたちに育てていきたいという気持ちでいっぱいになった。

コミュニティ・スクールの取り組みの中で行われている学習支援部、読書活動部、体験交流部、共同制作部、安全活動部の中で共同制作部の取り組みが最も気になる活動だった。私自身子どもの頃、みんなで協力して一つのを完成させたときの自分自身の気持ちの成長を感じることができたからだ。ものづくりを通して、協力して作る大変さを学びさらに地域の良さに気づけることが一番の魅力だと思った。

学校教育において、保護者からの理解を得ることは難しいことというイメージを持っていたけど、コミュニティ・スクールという取り組みでGTAのみなさんの協力があることによって決して難しいものではないと感じることができた。GTAの方々が学校の先生方と協力し合って子どもたちを育てていっている様子が保護者の方々に伝わっているからこそできることなのかなと感じた。

学校はそれぞれ個性があつていいと思った。それがコミュニティ・スクールであればなおさらだ。都会ではこういった形での運営は難しいものがあるが地方ではこのコミュニティ・スクールが教育をより活性化させるものだと思った。そして地方の中でも今回訪問した会見だからこそできる形ではないだろうかと感じた。地域の方々の協力的な姿勢、学校のオープンな姿勢が交差し会見小学校ならではのコミュニティ・スクールの形ができていのではないだろうか。

また、このコミュニティ・スクールの地域密着の教育が子どもたちにとって自分たちが住んでいる地域をより知ることができるおおきなきっかけとなる。そしてそのことが地域貢献のできる子どもを育てていくという利点につながる。そして子どもたちだけでなく保護者、地域の人たちにとっても、特におじいちゃんおばあちゃんなどのお年取りの人たちにとってもさまざまな発見をしあえるきっかけだ。

話を聞いてみてコミュニティ・スクールは、地域全体の活性、向上の重要な役割を担っていると強く思った。今回実際に現場に行ったことで講義だけでは学ぶことのできないとてもよい体験ができたと感じている。会見小学校を訪問したことを生かし、これからもさらにコミュニティ・スクールについて理解を深めていこうと思った。(宮森 沙弥)

以上のように、会見小学校では、2006年、学校関係者と地域住民の先進的な努力により地域協働学校運営協議会が設置にともない、あいみ学校応援隊が組織された。この応援隊は、学習支援部、協同制作部、体験交流部、GTA(会見町に通う孫を持つ祖父母の会)からなり、各部が活発に活動し、地域と学校とが密接な連携関係を構築していた。その結果、学校(教員)は子どもを育てることに集中できる環境が創り出され、落ち着いた学校となっていた。また、コミュニティ・スクールに関わる地域住民は、直接子どもたちの指導者となったり、経営にも関与したりすることから有能感や役立ち感が意識されていた。とりわけ、GTAの皆さんは学校と関わることで生き甲斐となっていた。コミュニティ・スクールの活動の中で、地域住民と学校教員との間には、有意義な関係性が成立していることがわかった。

かつて、学校は地域文化の中心であった。運動会、文化祭など地域の文化を子ども達や教師さらに地域住民が一丸となって創出してきた。西洋でいうところの教会のような存在だった。コミュニ

ティ・スクールは、地域住民が学校に集い、地域文化を共に創出する場となることが期待できる。

(5. 文責・土井康作)

5. 海士町訪問研修の実施

(1) 訪問研修の概要

【参加者】・・・計11名(学生8名(男子3名・女子5名), 教員3名)

- ・学科内訳・・・地域政策3人, 地域教育1人, 地域文化3人, 地域環境1人
- ・引率教員3名(野田邦弘(地域文化), 仲野誠(地域政策), 竹川俊夫(地域政策))

【事前準備】

①全体ミーティング：8月11日(木)

- 1) 訪問研修の説明, 2) 日程決定, 3) 事前学習会の実施について, 4) 実行委員の選出

②事前学習会

第1回：8月29日(月)・・・発表者3名, 第2回：9月4日(日)・・・発表者5名

【行程】

| 9月6日(月) | |
|---------|--|
| 6:30 | 大学本部前よりバス出発(道の駅北条公園経由)→9:00 七類港着 |
| 9:30 | フェリー出港→12:40 海士町・菱浦港着 <昼食(亀乃)> |
| 13:50 | 隠岐開発総合センター研修室(役場と同一敷地)に到着 |
| 13:50 | 山内町長と懇談(～14:40) |
| 14:45 | レクチャー「海士町の概要と産業振興の取り組み」(～16:00) (講師) 地産地商課・課長：上田賢二氏 |
| 16:05 | レクチャー「隠岐島前高校の魅力化に向けた取り組み」(～16:55) (講師) 隠岐島前高校魅力化プロデューサー：岩本悠氏 |
| 17:15 | 隠岐自然村(宿)に到着 |
| 17:40 | 島前高校生との交流(～18:15) |
| 18:15 | 法政大学現代福祉学部3年生の皆さんとの交流(～18:45) |
| 18:45 | <夕食> |
| 9月7日(火) | |
| 7:00 | <朝食> |
| 8:30 | 隠岐自然村出発→島内エクスカージョンへ |
| 8:45 | 後鳥羽院資料館～御火葬塚～隠岐神社(ガイド) 総務課・課長代理：高橋弘丞氏 |
| 10:00 | 隠岐潮風ファーム～明屋海岸～岩がき生産所～御塩司所～天川の水～CAS凍結センター～キンニャモニャセンター(～11:30)(ガイド) 地産地商課長：上田賢二氏 |
| 11:30 | <昼食(船渡来流亭)> |
| 13:00 | 隠岐開発総合センターへ移動 |
| 13:15 | レクチャー「海士町の地域共育の取り組み」(～14:30) (講師) 地域共育課・課長：松前一孝氏 |
| 14:40 | レクチャー「海士町の保健・福祉・医療の取り組み」(～15:50) |

| | |
|---------|---|
| 16:05 | (講師) 保健福祉課・課長: 浜見優子氏 国民健康保険海士診療所の見学 |
| 16:30 | 福祉センター経由で宿に移動→17:00 隠岐自然村(宿) 到着 |
| 18:30 | 岩本氏を招いてBBQ (~22:00) |
| 9月8日(水) | |
| 7:00 | <朝食> |
| 9:00 | Iターン者・商品開発研修生との交流(隠岐自然村) (Iターン者) 隠岐自然村の深谷村長とスタッフの近見氏 (商品開発研修生) 濱中裕代氏・川添顕史氏 (~10:30) |
| 10:50 | 海士町役場にお礼の挨拶 |
| 11:00 | 菱浦集落の散策 (~11:30) |
| 11:30 | <昼食(島生まれ島育ち隠岐牛店)> |
| 13:20 | 海中展望船あまんぼうに乗船 (~14:15) <フェリー乗船まで自由時間(お土産を購入)> |
| 15:10 | フェリー出港→17:55 七類港着 |
| 18:15 | バス出発→20:30 大学本部前着(寿城・道の駅北条公園経由) |
| 20:30 | 解散 |

(2) 実行委員会の開催と事前学習会の実施

2009年度・2010年度に続き、今年度も海士町訪問研修が実施されることとなった。5月18日の山内町長の講演を受けて学生から参加希望を募ったところ、当初はこれまでに最大の27名から暫定の申し込みが寄せられていたが、夏季休業期間に入った8月11日に実行委員会を開催し、この時点で参加希望者の最終確認をしたところ、3分の1以下の8名に減少していた。大幅な人数の減少の原因については、研修日程とサークル等の活動予定とが重なったことが大きい。最初の申し込みの段階では訪問研修の日程を決めずに希望を募っているため、日程の決定と同時に参加を取りやめた学生もいた。この辺りは来年度に向けた課題であり、今後は研修日程を確定させてから参加申込みを受け付ける必要があると思われる。一方最終的に残った8名のメンバーについては、例年その多くが地域政策学科の学生で占められて来たが、今年度に関しては、地域政策3名、地域教育1名、地域文化3名、地域環境1名と、3年目にして初めて全学科から参加者が出揃い、少数ながらも学部を挙げた行事という印象が強まった。

ここからは例年通り、訪問研修に向けて実行委員会を開催し、1) 訪問研修の説明、2) 研修日程の決定、3) 事前学習会の実施内容と日程の決定、4) 実行委員(委員長・会計)の選出を実施した。今回初めて地域文化学科の学生が実行委員長を務めることになり、研修日程を9月6~8日の2泊3日と決定するとともに、宿の手配や研修プログラムについては、実行委員長がメンバーを代表して海士町側に連絡を取って細部の調整を進めた。また、事前学習会を8月29日と9月3日のそれぞれ午後2回開催することとなり、誰がどの分野について事前調査を行うか担当の振り分けを行った。そして、8月29日の事前学習会では、海士町・隠岐の島の人口統計や主要な観光資源、歴史に焦点を当てて3名の学生から発表が行

われ、9月3日には残る5名より、海士町の経済振興策や島前高校の改革への取り組み、医療・福祉の現状や島の自然環境をテーマにしたプレゼンテーションが行われた。

(3) 訪問研修プログラムの様子

①山内町長との懇談会と地産地商課上田課長のレクチャー（1日目）



海士町に到着し、昼食をとった後に役場裏の隠岐開発総合センターに向かうと、山内町長直々の出迎えがあった。続いて学生からの質問に対して山内町長が丁寧に答えていただく懇談の時間が50分ほどあり、その後に地産地商課の上田課長によるレクチャーが行われた。上田課長からは、海士町の基本統計データに基づきどのような地域課題を抱えているかの説明と、現在海士町が取り組んでいる経済活性化への様々な取り組みについての説明があった。

②島前高校魅力化プロデューサー岩本氏のレクチャー（1日目）



上田課長に続いて岩本悠氏よりレクチャーが行われ、島前高校が直面している厳しい現実の説明のあと、「人間力」を物差しとする海士町の地域共育のコンセプトや、それと関係する島前高校の様々な改革について一通りの説明があった。離島が直面する諸課題を克服し、地域社会を持続させるには、地域の総力をあげた人材の育成が不可欠だという理念のもとで、子ども議会や島丸ごと図書館構想など、地域に密着した教育が展開されている。また、今年度からは、教育委員会に集落支援員が配置さ

れ、子どもたちに限らず住民主体の地域づくりを広く支援する仕組みが導入・強化されたという。これまでややもすると行政主導色が強いという印象のある海士町だが、そうした問題を克服する仕組みも既に抜かりなく取り入れられているようである。

③島前高校生の〇君との交流（1日目）

今回の研修では、会場の都合により公営塾での島前高校生との交流ができなくなった。そのため岩本氏の計らいにより、慶応大学のAO入試に挑戦する島前高校生の〇君と宿所の自然村で交流する時間を持ち、〇君のAO



対策用のプレゼンテーションを聞いてアドバイスするという場が設定された。O君は、昨年の訪問研修で鳥大生に大きな衝撃を与えた公営塾の「夢ゼミ」の出身者である。O君が鳥大生を前に全く臆することなく、将来は海士町に戻って地域のリーダーになる等のビジョンを熱く流暢に語る姿に、今年の訪問団も圧倒されていた様子であった。

④後鳥羽院資料館・隠岐神社および主要観光スポットと産業施設の見学（2日目）



後鳥羽院資料館の展示資料

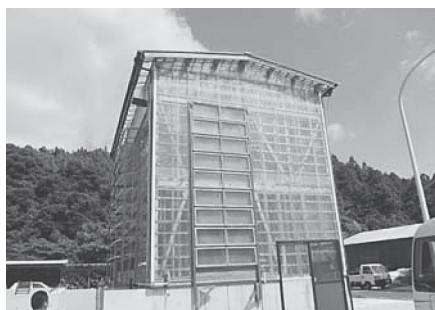


隠岐神社を見学

研修 2 日目の午前中は町内エクスカージョンが行われた。まず後鳥羽院資料館と隠岐神社を見学した後、隠岐潮風ファーム～明屋海岸～岩がき生産所～御塩司所～天川の水～CAS 凍結センター～キンニャモニャセンターというコースで主要な観光スポットと産業施設の見学に進んだ。



美しい明屋海岸の景色



御塩司所を見学

⑤地域教育課松前課長と保健福祉課浜見課長のレクチャー（2日目）

2日目の午後は隠岐開発総合センターで2つのレクチャーを受けた。1つは「地域共育」に関するレクチャーであり、町の総合計画において示された「人間力」の開発のための多様なプログラムや、島丸ごと図書館構想等の取り組みが紹介された。もう1つは、今回初めて話を伺うことになる「医療・福祉」というテーマである。海士町内では町営の診療所が地域医療の核として重要な役割を担っているが、やはり離島という立地上の不利から、産科の不在や看護師不足等の現実があることがクリアに示されていた。なお、最近では緊急時の対応としてドクターヘリが導入さ



松前課長のレクチャーの様子

れたので、医療不安はある程度緩和されているとこのことである。

⑥岩本悠さんを交えてのBBQ（2日目）



学生たちにとって最大の楽しみの1つは、海士町の海の幸をふんだんに使ったBBQである。山内町長から鯛や色鮮やかなヒオウギ貝等の海産物の差し入れもあり、豪華な食事に会話も弾んだ。また、多忙中、岩本悠さんもBBQに駆けつけてくださり、岩本さんを囲んで即席の「夢ゼミ」が開講された。

⑦Iターン・商品開発研修生との交流（3日目）



車座になってIターン者の話に耳を傾ける

最前列左から深谷氏・川添氏・近見氏・濱中氏

最終日の午前中は、宿舍の隠岐自然村に二人の商品開発研修生（濱中氏・川添氏）を招き、さらに自然村の深谷村長とスタッフの近見氏にも加わっていただき、みなさんから海士町へのIターンに関しての動機や実際にIターンをしてみたの感想などを伺った。濱中氏は昨年話を伺った方であったが、関西から海士町に来て地元の男性と結婚されたとのことで、若者のIターンを奨励する政策が地域の人口増加につながることを、身をもって実証されている。1時間半の予定で交流会を実施したが、あっという間に終了の時間が来てしまった。

⑧海中展望船「あまんぼう」での遊覧（3日目）

3日間の研修期間を通じて最高の好天に恵まれた今回の訪問研修は、最終日の昼に「島生まれ島育ち隠岐店」で隠岐牛の焼肉に舌鼓を打った後、いよいよ「あまんぼう」の遊覧を残すのみとなった。穏やかな波の中、最後のプログラムで美しい海士町の海を満喫することができ、学生たちのテンションは最高潮に達していた。



(4) 訪問研修を終えて

「地域学入門」の番外編としてこれまで2カ年連続して実施してきた本研修は、これまで参加した学生たちに大きな刺激と発見を与えてくれた。そして3度目となる今回もまた8名の学生たちに大きな成長へのきっかけをプレゼントしてくれたようである。毎年、研修終了後に訪問の記録をまとめた『海士町訪問記』を発行しているが、ある学生の訪問記から一部を抜粋してみよう。

今回の海士町訪問で得られたものは驚くほど多かった。先述した地域学についてのこともそうであるが、経験として学ぶことも多かった。地域を見るという経験、ディスカッションの経験、研究発表の経験（少し大げさかもしれないが）、そして梅田君の言葉を借りるのであれば「本物」と会う経験、私が言うところの「面白い人」に会う経験である。

反省し学ぶ点も数えきれないほどあった。レジュメは発表前にプリントアウトすること、デジカメを持ってフィールドワークに出ること（バッテリーは2つ用意すること）、地域を見る時に様々な視点から観察すること、そして地域にうっかり飛び込んでみるとこんなにも学べるといふこと、などである。そして、これからの反省会、海士町への事後報告にも多くの学ぶ点があるだろう。

また、この訪問記のタイトル「人々を輝かせる島に学ぶ」であるが、これは私が海士町を訪問して感じた素直な気持ちである。島で生きる方々の姿は、自らの役割を見出して、それぞれが活躍していた。各々が何かを見つけてそれを磨こうとして自らが輝いている。それが直に感じられる海士町に私は多くを学んだ。それを伝えたいというのがこの訪問記のメインテーマなのである。

タイトルを考える時にもう一つ思い浮かんだことがある。二宮尊徳、薪を背負いながら本を読む金次郎像で知られる彼の後の名前である。私が通っていた高校、報徳学園は二宮尊徳の教えを基にした教育をしている。以德報徳、至誠勤労、分度推譲という三つの尊徳が挙げた思想をベースに教育をしている。尊徳が一体何をしたか知らない人々も多いのだが、別に薪を背負って勉強し続けたわけではない。尊徳は農民の出でありながら藩の財政の立て直し、荒廃した農村の復興を行った偉人である。いわば私たちが学ぶ地域政策学のさきがけとなった人物とも言えるのである。ではどうして尊徳がこのタイトルと関係するのだろうか。彼の農村復興の第一段階として「農村の人々の心を耕す」というものがある。荒廃した農村に住むものは心も荒れて「この村は何をしてもだめだ」とか「耕してもたくさんできないなら怠惰な暮らしをするほうがよい」と思っている。そんな心がある限りどうしても村は復興できないと尊徳は考えていた。そのため、ときに激しく論じ、ときに何もせず彼らが気づくまで放っておいた。そうして気づいた彼らは輝き始める。心を耕し輝く稲穂の実りを迎える。その様子が海士町の地域活性化に重なって見えたのだ。<奥河翔太（地域政策学科）「人々を輝かせる島に学ぶ」>

上記レポートには、研修で受けた大きな衝撃を何とか言葉に変換し、その体験を「地域学」あるいは「地域政策学」と関連づけて理解しようという試みが見られる。恐らくこうした経験は、地域学入門の講義だけではできなかったはずであり、また、地域学入門の講義を受けずに海士町を訪れてもこうした思いには至らなかった可能性が高いのではないかと思われる。研修参加者に

多かれ少なかれ共通した反応が見られるという点からも、地域学入門の講義を終えた直後というタイミングで、地域づくりのカリスマが数多く集う海士町に飛び込むという経験は、改めて地域学への理解に大きく役立つのではないと思われる。しかし、ただ訪問しただけでこれだけの気づきが得られるものではない。(2)で解説したように、5月18日の山内町長による講義だけに留まらず、8月29日・9月3日と2度にわたる事前学習会を実施し、講義の復習と訪問研修の予習を入念に行うことで、改めて現地では何を観察したり質問したりすべきかを明確にし、「学びの姿勢」を確立させるよう指導していたことも重要なポイントであったと思われる。

余談であるが、上記のレポートの作者は、海士町での体験を是非多くの学生に共有させたいとして、2012年3月に島前高校の改革に取り組む若本悠氏を鳥取大学に招へいし、講演会やワークショップを開催しようと計画を立てているところである。こうしたイベントを企画したいと考え、仲間を組織して実行しようとする事自体、彼にとっての大きな成長を意味しているに違いない。

2011年度「地域学入門」(水2限)出席カード

| 授 業 日 | 月 日 | | | | |
|--------|-----------------------|--------|--------|--------|--------|
| 学 科 ○印 | 地域政策学科 | 地域教育学科 | 地域文化学科 | 地域環境学科 | その他() |
| 学籍番号 | (番号記載は間違いなく=出欠チェックの為) | | | | |
| 氏 名 | | | | | |

- あなたが入学した入試の種別はどれですか？(問1～4は該当するもの1つだけに○)
1 A O 2 推薦 3 前期 4 後期 5 その他(留学生等)
- 鳥取大学地域学部の志望度と「地域学」への関心の関係は次のどれでしたか？
1 第1志望/地域学に関心あった 2 第1志望/地域学に関心なかった
3 第1志望以外/地域学に関心あった 4 第1志望以外/地域学に関心なかった
- 地域学入門を受講して入学時と比べて「地域学」への興味・関心は高まりましたか？
1 高まった 2 やや高まった 3 余り高まっていない 4 高まっていない
- 上記で1と2を選んだ方、講義の特にどの部分で興味・関心が高まったと感じますか？
1 第1部(学生の地域連携・交流活動) 2 第2部(地域づくりの実践)
3 第3部(地域学とは何か) 4 ディスカッション
5 学生の予習事項発表 6 その他()
- 地域学入門をよりよい講義にするために改善すべきことは何ですか？
- 地域学への理解を深めるために、あなた自身取り組みたいと思うことは何ですか？
- 講義全体を通じた感想・意見

6. アンケート結果にみる新入生の変化

(1) 学生アンケートのねらいと方法

これまで今年度の「地域学入門」の講義概要や講義の運営に関する詳細を述べてきたが、ここではこうした一連の講義を受けた新入生にどのような変化が生じたかを、7月27日の最終講義の際に新入生から回収したアンケートを中心に検討する。

本アンケートのねらいは、次の3点を明らかにすることである。すなわち、①「地域学」に対する新入生の関心が、学科や入試種別等によってどのように異なるのか、②「地域学入門」を受講することが「地域学」への興味・関心を高めることに役立っているのかどうか、そして、③地域学への興味・関心が高まっているとすれば、それは講義のどの部分の影響が大きいのか、の3点である。

①を明らかにする理由は、現実問題として「地域学」に関心があつて本学部を志願する学生と全くそうでない学生が混在する中で、彼らの「地域学」への興味・関心を高めるために、まずは入学時点での彼らの関心の度合いが学科や入試種別等によってどう相違するのかを把握しておく必要があると考えられるからである。その上で②について、「地域学」への導入的役割を受け持つ本講義が、その位置づけの通り、元々意識の乏しい者も含めて新入生の「地域学」に対する興味・関心を高めることに実際に役立っているのかどうかの検証が必要だと考えられるからである。さらに③については、本講義が学生の意識向上に役立っているとすれば、そうした変化が、先に示した第1部から3部の講義構成や中間・総合の2度のディスカッション、あるいは学生の事前学習内容の報告といったそれぞれの要素の中で、特にどの影響を強く受けて生じたのかを明らかにすることが必要だと思われたからである。

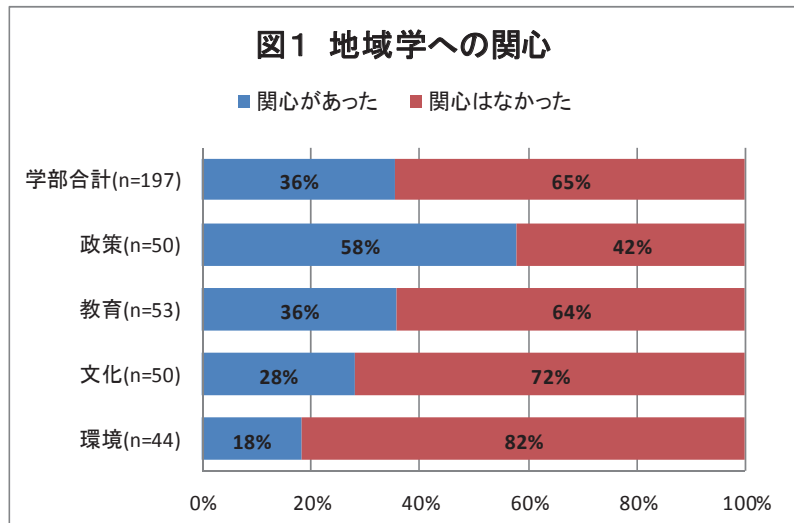
本アンケートは、講義の出席カードを利用して実施されたものであり、学生が記入すべき内容は前頁に掲載した通りである。7月27日の講義の最後にアンケートの記入時間を用意し、講義に出席していた新入生全員から提出を求めた。なおトータルの回収数(=出席者数)は197であった。

(2) アンケート結果①：新入生の地域学への関心の有無

①学科別に見た地域学への関心の有無の傾向

図1は地域学への関心の有無を学科別に示したものである。学部全体では、「関心があった」割合が36%であるのに対して、「関心はなかった」が65%（合計が100%でないのは端数処理の関係による）と、新入生3人に2人は地域学への関心を持たずに入学している現実が浮き彫りになった。

一方、関心の有無を学科別に見た場合、「関心



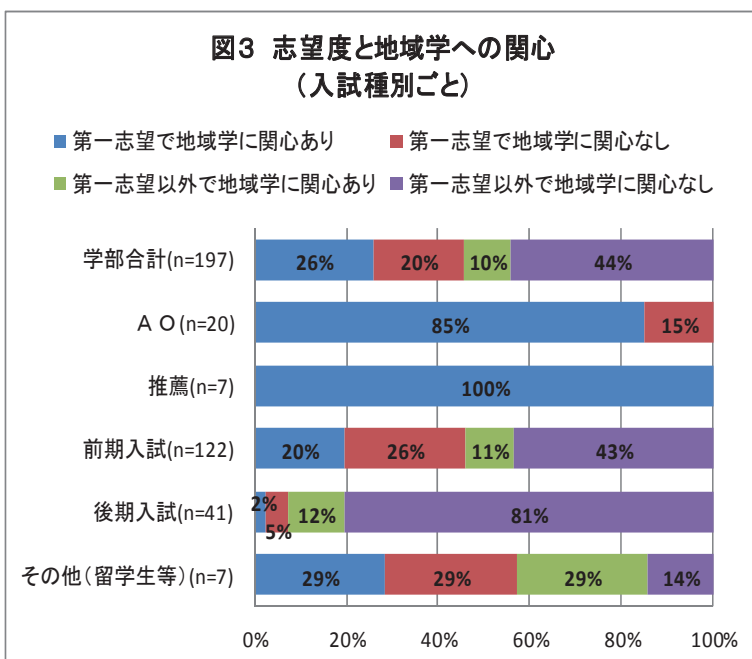
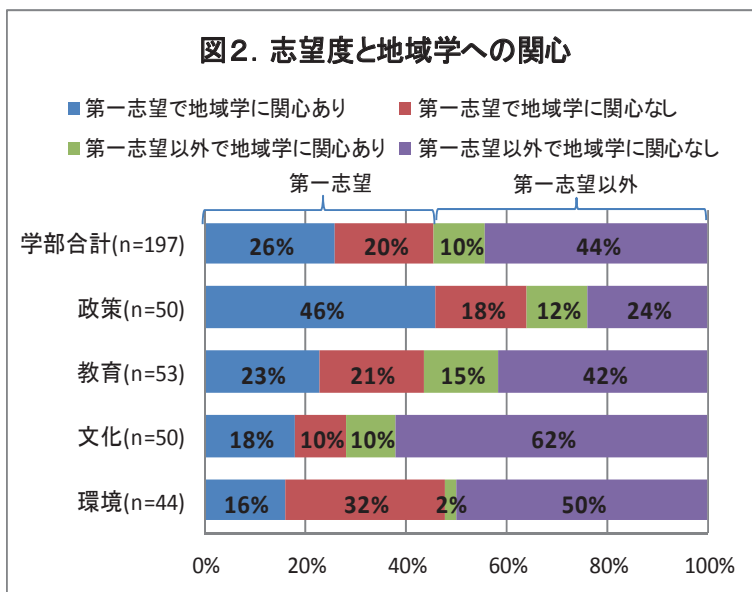
があった」の割合は、地域政策の58%を筆頭に、地域教育：36%、地域文化：28%、地域環境：18%と減少しており、最多の地域政策学科と最少の地域環境学科では40ポイントもの大差が存在している。特に地域文化・地域環境では、地域学への関心が無い新入生の割合がそれぞれ7割、8割を超えて大多数を占めていることが大きな特徴である。

②学科別に見た志望度と地域学への関心の傾向

図2は、第一志望か否かの志望度と地域学への関心の有無をあわせて学科別に示したものである。

学部全体では、第一志望の割合が46%、第一志望以外が54%とやや第一志望以外の新生が多くなっている。これらに地域学への関心の有無という要素を加えて分析すると、第一志望については、46%の6割弱に相当する26%が地域学に関心ある者で占められている一方、第一志望以外で地域学に関心のある新生は、54%の約2割に当たる10%に留まっていた。

これを学科別に見ると、第一志望の割合では地域政策がトップの64%、次いで地域環境が48%、地域教育が44%、地域文化が28%となっている。しかし、第一志望者の地域学への関心の有無を学科別に比較してみると、地域政策学科では第一志望64%の約7割に相当する46%の者が地域学に関心があるのに対して、地域環境学科は逆に第一志望48%のうち地域学に関心がある者の割合は16%と3割余



りに留まっている。第一志望以外の学生の地域学への関心が希薄であるのは十分予想されることであるが、第一志望の学生についてもその傾向は学科ごとに異なり、地域環境学科のように地域学への関心度合いの低い者が多数を占める場合もある。総じていえば、地域政策学科は第一志望の割合及び地域学への関心度合いについてどちらも高い傾向があるのに対して、地域文化学科は第一志望の割合・地域学への関心度合いのどちらも低い傾向がある。また、地域環境学科は、第一志望の割合は比較的高いものの地域学への関心度合いは全学科で最も低い傾向があり、地域教育学科については、第一志望の割合・地域学への関心度合いのいずれも学部全体の値に近い傾向があることが明らかになった。

③入試種別ごとに見た志望度と地域学への関心の傾向

図3は上記②の傾向を入試種別によって示したものである。まずAOと推薦の両入試で入学した者は、当然ながら全員が第一志望であると同時に、AO入学者の一部を除きほぼ全員が地域学に関心をもって本学部を志願している。次にこれと対極的なのが後期入試で入学した者であり、その9割以上が第一志望以外であって、しかも81%の学生が地域学に関心が無い状況で入学している。

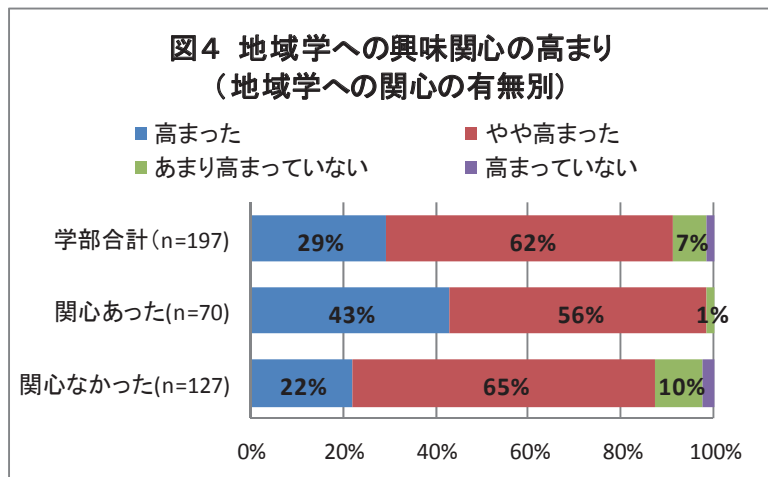
一方、前期入試については、志望度は第一志望が46%、第一志望以外が54%と学部合計と同様の値を示しているが、地域学への関心という点では、第一志望の26%と第一志望以外の43%の計69%という多数の学生が地域学に関心が無かったと回答しており、後期試験を含む一般入試受験者の地域学への関心をどう喚起するかが今後の大きな課題として浮き彫りになったと言える。

(3) アンケート結果②：地域学への興味・関心の高まり

①地域学への関心の有無別に見た地域学への興味・関心高まり

上記では、地域学部を志願し入学してきた学生の地域学に対する関心の有無について分析してきたが、ここでは2011年度前期の「地域学入門」の講義を通じて、学生たちの地域学に対する興味・関心にどのような変化が生じたか、特に「興味・関心は高まったのか」という点に焦点を当てて現状を明らかにしたい。

図4は、講義を通じて地域学への興味・関心が高まったかどうかを、地域学への関心の有無に分けて示したものである。これを見れば一目瞭然であるが、元々の地域学への関心の有無に関係なく、地域学への興味・関心が高まった・やや高まったと肯定的な回答をした学生（高まった群）が大部分を占めている。この「高まった群」の割合は、学部全体で91%（高まった：29%、やや高まった：62%）と非常に高い割合を示しており、特に地域学に関心があった層では99%（高まった：43%、やや高まった：56%）とほぼ全員に肯定的な変化があったことが分かる。一方、地域学に関心が無かった層の「高まった群」



は87%（高まった：22%，やや高まった65%）であり，関心あり層と比べると12ポイント少なく，とりわけ「高まった」の割合は，関心あり層の43%の半分に留まっている。とはいえそれでも約9割の学生に肯定的な変化が現れたというのは特筆すべきことと言えるだろう。

②学科別に見た地域学への興味・関心高まり

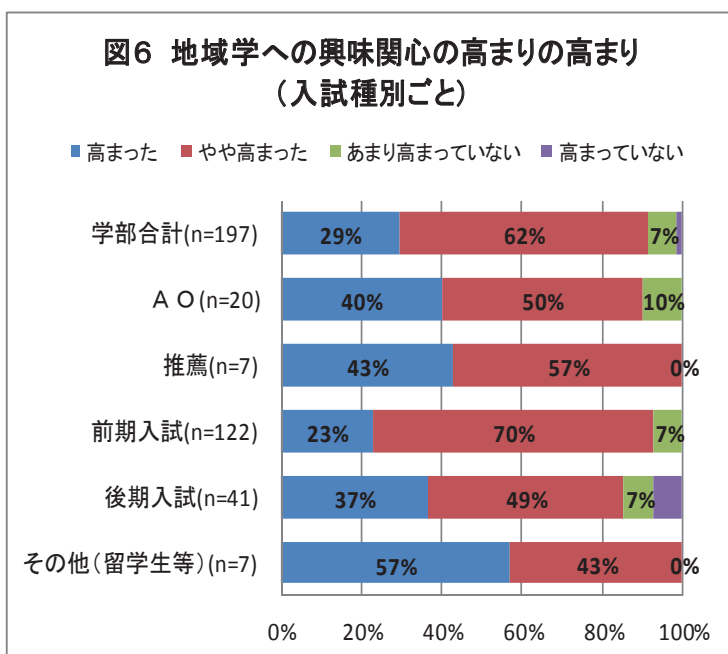
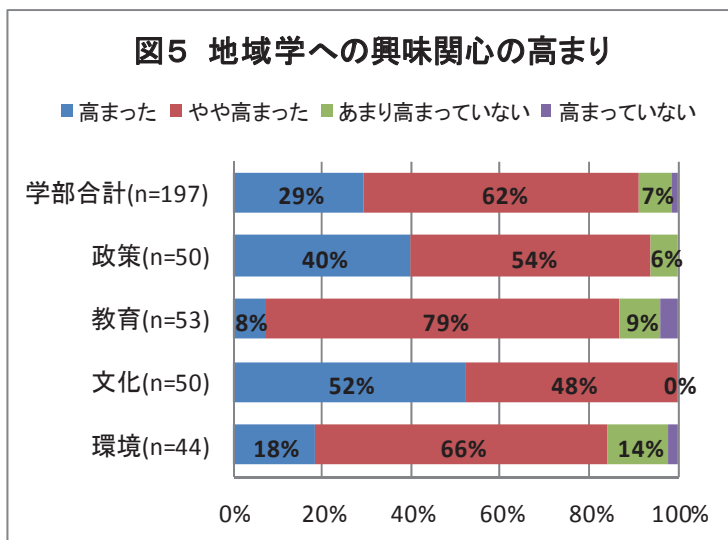
図5は，地域学への興味・関心の高まりに関するデータを学科別に示したものである。ここでも上記①でみたように，各学科とも「高まった群」が大多数を占めている（ちなみに最多は地域教育学科の100%で，最少は地域環境学科の84%）。

学科別の傾向では「高まった群」のうち，「高まった」という積極的な回答の割合に大きなバラつきが見られる。例えば，地域文化学科と地域政策学科の「高まった」

の割合は，それぞれ52%，40%であるのに対して，地域環境学科と地域教育学科の割合は，それぞれ18%，8%と前2学科と比べて大きな差が生じている。

②入試種別ごとに見た地域学への興味・関心高まり

次に図6の入試種別ごとに示した地域学への興味・関心の高まり具合を見てみると，「高まった群」もその中の「高まった」の割合も，前期入試入学者の「高まった」の割合が23%と相対的に低い以外は学科別データのような極端なバラつきはなく，いずれの入試種別の入学者にも大きな効果をもたらしていることが分かる。逆にどうして学科別のデータにおいて「高まった」の割合に極端な差異が生じているのかが疑問になるが，これは地域教育・地域環境それぞれの学科の教育カリキュラムや将来



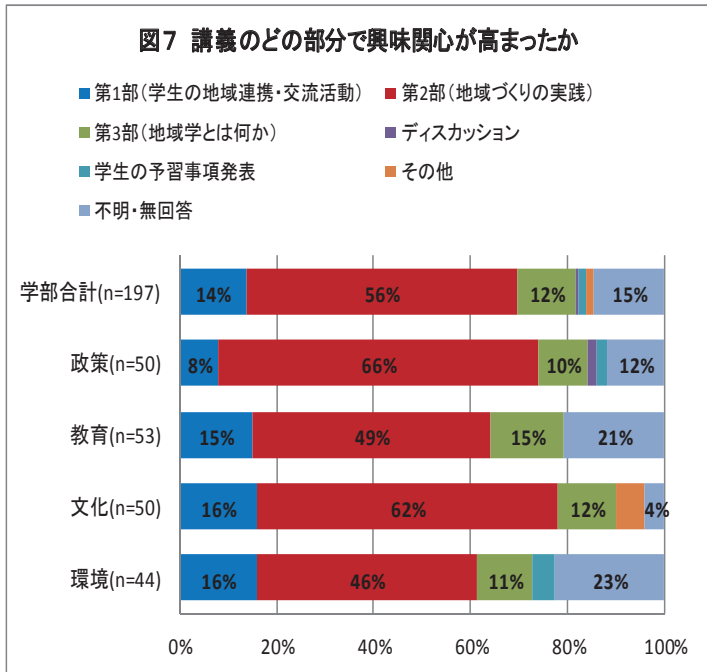
の進路と地域学入門で扱う事例等の内容に距離感があり、自分自身の問題として受け止めることが難しいことに一因があるのかもしれない。

(4) アンケート結果③：講義のどの部分で興味・関心が高まったか

図7は上記(3)で見た新入生の地域学への興味・関心の変化が、地域学入門のどのパートによって強く影響を受けているかを学科別に示したものである。

学部全体のデータを見ると、最もその割合が大きいのは、外部講師を中心に地域づくりや地域研究の実践を紹介した「第2部(地域づくりの実践)」の56%で、以下、学生の地域連携・地域交流活動を中心に紹介した「第1部」(14%)、「地域学とは何か」について教員からの理論的な説明を行った「第3部」(12%)と続くが、一方で15%の学生は「不明・無回答」であった。

学科別で見ても、学部全体の傾向とは大きく異なることはなく、どの学科も「第2部」の割合が最も大きい。敢えて詳細な傾向を読み解いてみると、「第2部」の割合が相対的に高いのは、地域政策学科の66%と地域文化学科の62%であるが、この2学科は図5で見たように地域学への興味・関心が「高まった」とする割合が相対的に高い学科である。ここからも、学生の地域学への興味・関心の高まりと学科カリキュラムや学生の将来の進路に一定の関係性が伺われるのではないかと推察されよう。



(5) アンケート結果④：講義全体の感想(自由記述)

①講義を受けた感想(肯定的な感想)

| | |
|---------|-----------------|
| 講義が良かった | おもしろかった |
| | 1番役に立つ授業だった |
| | 実践の話がためになった、 |
| | 生の声が聞けてよかった |
| | 地域学を学ぶ上での基礎が学べた |
| | 多くのことを知れた |
| | 3部に分けて学べてよかった |
| | 有意義な講義だった |

| | |
|----------------|------------------------------------|
| | 得られるものが多かった |
| | 第二部が一番面白かった |
| | 活動を分かりやすく紹介していて、興味が持てた |
| | 地域学を身近に感じる事ができた |
| | 第二部が興味深かった |
| | 有意義な時間だった |
| | 失敗例も聞けてよかった |
| | 地域学とは何か分かりやすく導入していていい |
| | 講義して下さった方に大きな魅力を感じた |
| | 失敗例をみるという意見はおもしろいと思った |
| | レベルの高い講義が受けられる授業だ |
| | 第二部が非常によく、刺激を受けた。 |
| | 地域というものに、目を向けるように自身を変えてくれた講義だった |
| | 外部講師の話が聞けてよかった |
| | 有意義だった |
| | めったに聞けない厳しい言葉や、地域学への思いが伝わり、面白かった |
| | 地域学への関心が高まった学生が多く、いい講義だと感じた |
| 他学生の意見が聞けて良かった | 他の学生の意見が聞けてよかった |
| | ディスカッションで他の学生の話が聞けてよかった |
| | 他学科について理解を深められた |
| | ディスカッションでいろいろな他学生の意見が聞けて楽しかった |
| | 他の学生の意見が聞けてよかった |
| | 「自分に何ができるのか」という意見がすごいと思った |
| | 第2部の皆のあつさに驚いた |
| | 他学生の意見が聞けてよかった |
| | 皆の意見が聞けてよかった |
| | 学生がしっかりした意見を持っていてすごいと思った |
| 討論会が良かった | 聞いている方がなるほどと思えるので、教授と学生のぶつかり合がよかった |
| | ディベートも聞いていて本当にためになった |
| | ディスカッションが白熱して、いろんな意見が聞けてよかった |
| | 討論会で学生の意見を聞いて刺激を受けた |
| | 二回目はすばらしい討論会になりよかった |
| | 意見を言えてよかった |
| | 2回めの討論会は多く意見が出て、討論会らしかった |
| | 発表ができてよかった |
| | 今まででいちばんしっかりした討論ができた |
| | 皆の前での発表が貴重な体験になった |
| 地域学への関心が高まった | |

| | |
|-----------------------|--|
| 地域学への関心や理解が促進された | 地域学に興味を持てた |
| | 地域学に出会えてよかった |
| | 地域学に対して興味がわいた |
| | 地域を身近に感じられた |
| | 地域学について深く考えられた |
| | 地域学の意味が分かった |
| | 地域学へ関心が持てるようになった |
| | レポートが多かったが、そのおかげで地域学に対する関心が高まった |
| | 地域学が少し理解できた |
| | 地域学について、大体理解できた |
| | 地域学を学ぶ上での基礎ができた |
| | 鳥取になじんで、地域学を学びたい |
| | 回を重ねるごとに、地域学とは何かという思いが強くなった。 |
| | 地域学には多くの学問が関係していて、自分がこれから先何をしていきたいか考えるには最適だと思った。 |
| | 地域学の内容が分かって、重要性が見いだせた |
| | 地域学のかたちが、はっきり分かるようになった |
| | 地域学に対する印象（土地的なものだけ）が変わった |
| | 地域学のイメージができた |
| | 地域学を今は理解できるようになった |
| | 地域学に答えはない |
| 地域学部に来てよかったと思えるようになった | |
| 地域への関心 | 講義を通じて地域について分かった |
| | 地域を身近に感じられた |
| | 地域への関心が高まった |
| | 地域という言葉に嫌悪感を持っていたが、授業を聴いて違う捉え方を知り、関心が高まった。 |
| | 地域学部に来てよかったと思えるようになった |
| | レポートが多く大変だったが、その分考える機会が多くなり、興味、関心を持つようになった |
| | 授業を通じて地域を考えるいい機会になった |
| | 地域と地域活動に関心が高まった |
| | 講義を通じて地域について分かった |
| | 地域について勉強になった |
| 講師への評価 | 外部講師の方の話がよかった |
| | 先生が学生の疑問にこたえてくれた |
| | レポートへのアドバイスが参考になった |
| | 講師の熱意が感じられた |
| | (先生が) 学生に、地域学を考えてもらおうとしてくれていると感じた。 |

| |
|-----------------|
| 地域学への先生の熱意が伝わった |
|-----------------|

②講義を通じた自分自身の変化や気づき

| | |
|---|---|
| 地域学入門の講義を通じた自分自身の変化や気づき | 自身の考え方，見方が変わった |
| | モチベーションが上がった |
| | もっと鳥取のことを知り，自身もこの地域の一員だと考えていきたい |
| | 自分なりの地域に対する考え方を持てるようになりたい |
| | コミュニティ・スクールや国際講習に参加するので，しっかり学び吸収したい |
| | もっと自分の考えをしっかりと持ちたい |
| | レポートが感想文にならないよう，考えを深めたい |
| | 地域学を学んでからテレビで流れる地域に関心を持つようになった |
| | これからは客観的に地域を見ていきたい |
| | 税金やごみなど基盤となるところにも目を向けたい |
| | 文化への興味が地域への興味へとかわっていった |
| | 自身の興味，関心を探っていきたい |
| | 教養を深めたい |
| | 多くのことに興味を持って，視野を広げたい |
| | 鳥取になじんで研究すること |
| | 地域の政策と地域特有の環境を連携させて，地域づくりがしたいと思うようになった |
| | 新しい地に踏み込みたい |
| 色々な経験を積んでいきたい | |
| 自分の住む地域に活気がほしいので，今後地域学とその視点について考え，実践したい | |
| 自分で何もできておらず，今後どのような活動をしたいか定めて行動したい | |
| 視野を広げることが大切 | 他学科に興味を持ちたい |
| | 教育以外の視野も持っていきたい |
| | 教育以外にも関心を持ちたい |
| | 今後いろんな面から地域学を見ていきたい |
| | 心理学を軸に，他分野についても関心を広げたい |
| | 様々な分野から地域学を学ぶことが大切だ |
| | 様々な地域に出て，今日育男あり方を見ることが，視野を広げることにつながり，地域学への理解を深めることになると思った |
| | 広い視野が大切だと感じた |
| | 様々な視点を持って考えていきたい |
| | 学科を超えて学ぶという考えに共感した |
| | 文化以外の面から，事業について見てみたい |
| | 学科を超えて興味を持つべきという意見に共感した |
| | 常に疑問の目を持ち続けること，視野の拡大が必要だ |
| 広い視点を持つことが大切だ | |

| |
|--|
| 他学科の視点も持つという考えに賛同した |
| 他学科について知ることで考えが深まる |
| 一つを掘り下げすぎず、広く関心を持つべきとの言葉に救われた |
| 様々な視点で広く関心を持っていきたい |
| 専門外の分野にも考えをめぐらしたい |
| 1つの面だけではなく、外から内からグローバルなどから見るのが地域を考える上で大切 |
| 文化や教育など面白いこともあると感じれた |
| 地域学は、広い視野で考える必要がある |

③講義の問題点や今後の課題

| | |
|----------------------------------|--|
| 講義が分かりづらかった | 地域学とは何か、まだモヤモヤしているので、じっくり考えたい |
| | どれも断片的な知識の獲得で、理解には至っていない |
| | 講師の話と地域学が繋がらない。 |
| | 自分の理解不足のせいだと思うが、あまり関心が持てず残念 |
| | 全体的に内容が難しかった |
| | 住民票や税金の話は、まだ稼いでいないので難しい。 |
| | 専門的な話で、難しかった |
| | 環境学科には難しい気がする |
| | 少し難しく感じる講義だった。 |
| 討論に関する教員への反駁 | 住民票の話が不快だった |
| | 住民票をうつさない=鳥取に関心がない訳ではない |
| | 住民票だけで、うつしていない人をいかげんだというのはどうかと思う。 |
| | また鳥取に愛着がないのだが、先生に、お世話になってるのだから貢献しろと言われるのはどうかと思った |
| | 住民票をどうするかは、先生が口を出すことではないと思った |
| | 住民票をうつさないのは、鳥取に根ざしくないからではなくて、地元の祭に参加したいからだ。もっと鳥取について知りたい |
| | 学生の質問に対する答えがずれている |
| | 地域学は鳥取のことだけ考えるのではないはずだから、住民票をうつしていないだけでいいかげんだというのは矛盾している |
| | 地元が好きなので住民票をうつす気はない |
| | 住民票をうつしてもうつさなくても、鳥取での活動は十分できると思う |
| 鳥取のためにできることは納税や選挙だけでなく、他にもあると思う。 | |
| その他 | 講義や、討論の空気が重い |
| | 外部講師が雲の上の存在のように感じられ、現実味がない |
| | 高校で学んだ内容の繰り返しだった |
| | 退屈だった |
| | 意見が出しにくい場だった |

| |
|------------------|
| 腹をわった話ができている |
| 環境の話が少なく、少し退屈だった |
| もっと内容を掘り下げてほしい |

7. 終わりに～今後に向けた課題

上記のアンケートの分析結果や自由記述欄における学生の感想が示しているように、本講義は、「地域学」に関心をもって入学した学生はもとより、「地域学」への関心が乏しくモチベーションが低かった学生についても「地域学」への興味・関心ひいては大学で学ぶ意欲や目的意識を高いレベルに引き上げており、その意味で、初年次必修科目としての導入的役割を高度なレベルで果たしていると評価することができるだろう。しかしながら、アンケートの分析結果もふまえて今年度の講義を振り返ると、反省点や問題点もそれなりに明確になってくる。以下、来年度の地域学入門のより良い講義運営に向けて課題を考察し、本報告を締めくくりたいと思う。

今年度の地域学入門の反省点としてまず挙げておきたいのは、シラバス構成の問題である。3の(3)で既に述べたように、昨年度までの反省を活かして「地域学とは何か」という抽象論を最後の第3部に移したものの、今年度の講義においてその効果はほとんど見られず、むしろ学生からは、「なぜ地域学とは何かを最初に講義しないのか」という意見が聞かれた。上記6の(5)の自由記述欄にあった「講師の話と地域学が繋がらない」という学生の声はこのことと関連している。すなわち、理論編を最後に移した企画会議の意図は、先に実践編で外部講師から優れた地域づくりの実例を学び、それを受けて「地域学とは何か」に答える理論が実践と結びつきながら解説されるという想定であったが、実際の講義では、実践との結びつきの部分が1・2部で紹介された事例と関連させて語られることがなかったため、学生は講師が語る理論と学んだ実践をストレートに結び付けることができず、不満を募らせていたのである。では来年に向けて講師陣にそうした配慮を依頼できるかと言えば、理論編を担当する講師が実践編の講義にすべて参加して学ぶことが非現実的であることから、極めて困難と言わざるを得ない。仮に講師陣が実践編に参加したとしても、それを自らの理論と結びつけて解説することは決して容易なことではない。したがって、無用な混乱を避けるためにも、次年度においては理論編を元の位置に戻すことが適切だと考える。ただし最後の講義(総合ディスカッション)等で、実践と理論がどう関係しているかについて何らかのフォローが必要になると思われるので、これについてはコーディネーターの宿題としたい。

次に改善が求められるのは、地域環境学科の学生が「地域学」をよりイメージし易くなるように、地域研究や地域づくりの事例を取り上げる数を増やすことである。討論会において「地域環境学科は地域づくりにどのように貢献できるのか」という趣旨の質問を発する学生がいたが、元々地域学への関心をもって入学した学生が少ない地域環境学科では、このような不満を抱く学生は少なからず存在すると思われる。こうした点をふまえて次年度においては、地域環境学科の教員が取り組む地域研究や、地域の環境保全を意識した実践事例を意図的に増やし、地域環境学科の新生が「地域学」を身近な問題として考えることができるように配慮する必要があると思われる。

3 点目は毎年の行事として恒例化しつつある海士町や南部町への訪問研修を今後どうするかという課題である。いずれの研修も、講義で学んだ事柄について、現地で当事者と交流しながら再確認するとともに、講義では伝わりきらなかった現地の細部を改めて理解できるという点では非常に大きな教育効果があると言える。筆者が引率教員の一人を務めている海士町訪問研修について述べる

と、現地訪問の準備作業として講義の復習はもとより、学生自身で海士町の歴史や自然環境、医療・福祉といった山内町長の講義ではほとんど語られていない部分も調べて予習し、さらに不明な点を現地で質問するように準備させているので、実際の訪問の際に海士町の行政関係者やその他の当事者との質疑応答が的確でより深いものになる。こうした準備の積み重ねによって「1年生にしては驚くほどしっかりしている」という現地での高い評価となり、逆にそのような評価を直接聞いた1年生にとっては大きな自信となるとともに主体的に学ぶことの意義を理解することにつながる。これはまさに学生が成長するプロセスそのものであって、海士町訪問研修はそうしたチャンスを提供してくれる絶好の機会である。しかしながらこの研修はあくまで「課外活動」であって、往復のバス代や引率教員の出張旅費等、大学から一定の経費補助はあるものの、毎年コーディネーターからの経費申請が必要であってさらに引率教員の参加も自発性に委ねられている。その意味では南部町への訪問研修も含めて実施基盤が非常に不安定と言わざるを得ない。教育効果と併せて先進自治体との連携という意味もある訪問研修をどのように位置づけるのかは、近々しっかりとした議論が必要になるだろう。私見としては、学生の参加インセンティブの向上と教員の組織的対応の確立を目指して、「1年生インターンシップ」という形で制度化することも一案ではないかと考える。

最後に指摘したいのは、「地域学入門」の講義を通じて高まった学生の「地域学」に対する興味・関心を、卒業までしっかりとフォローする学部教員側の意識的な働きかけの問題である。本講義の「地域学」に関する高い教育効果は、今年度に限ったものではなく、過去数年間も同様に新入生たちに大きな刺激を与えてきたはずである。しかしながら、先のアンケート結果にも鋭く表れているように、その刺激の多くを外部講師による実践事例の紹介に負っている現状があり、さらに「地域学入門」の終了後、学生は3年次に「地域学総説」を受講するまで「地域学」というタームと正面から向き合う機会が大幅に減少してしまう。そしてこの間、周囲の学生の様子を見てみると、せっかく「地域学入門」の講義を通じて得た気づきがあったとしても、それを十分に活かさず、「地域学」への興味・関心をみすみすトーンダウンさせてしまっているのではないかと感じてしまうことがある。「地域学入門」の講義によって高まった学生たちの「地域学」への興味・関心を高いレベルで維持し続けさせるためには、やはり日頃から学部教員が自らの学科や専門分野と「地域学」の関係性を意識しながら、教員自身の「地域学」を学生に語り続けることが必要ではないだろうか。これは筆者自身の課題でもあるが、「地域学」を語ることを、理論編を担当する一部の内部講師と優れた研究や実践を紹介する外部講師に一任するのではなく、教員一人ひとりが日頃の学生との対話の中で「地域学」を意識して語ろうとする努力が「地域学部生」としての学生のアイデンティティを育むとともに、ひいては「地域学」それ自体を発展させていく近道になるのではないかと思う。

文献

鳥取大学 (2011) 『平成 23 年度入学試験に関する調査』。

渡部昭男・竹川俊夫・土井康作・野田邦弘・岡田昭明 (2009) 「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容—2009 年度における授業実践のまとめ—」『地域学論集』6(2), pp.69-104.

渡部昭男・竹川俊夫・足立和美・鶴崎展巨 (2010) 「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容 (第 2 報) —2010 年度における授業実践のまとめ—」『地域学論集』7(2), pp.157-96.

(2012 年 2 月 3 日受付, 2012 年 2 月 17 日受理)